

2022年7月17日高知教会礼拝説教

松浦伝道師

説教:「十字架の上で」

聖書:ルカによる福音書 23章 26～38節

○はじめに

本日は十字架の死刑の判決を受けたイエス様が処刑の場へと引かれていき、実際に十字架の苦しみを受けられる個所を読みます。33節によりますと、その場所は「されこうべ」と呼ばれている所でした。マルコ福音書では、それはゴルゴタという地名で、その意味が「されこうべ」だったと語られています。同時の人々からゴルゴダの丘は、人の死を連想させるような場所だったのでしょう。イエス様はそこで十字架につけられたのです。本日の箇所には、この時、イエス様の他に二人の犯罪人が一緒に十字架につけられたことが語られています。33節によれば、イエス様の十字架を真ん中に、一人は右に、一人は左に、その二人の十字架が並んだのです。なぜイエス様の十字架が真ん中だったのか、それはおそらく、38節に語られている、イエス様の頭の上に掲げられた札のゆえだったのでしょう。

その札には、「これはユダヤ人の王」と書かれていました。この札は主イエスに死刑の判決を下した総督ピラトが掲げさせたものです。ユダヤ人の指導者たちは、イエスをピラトに訴え出るに際して、この男は自分がユダヤ人の王だと主張している、と語りました。つまりローマの支配を否定して自分がユダヤの支配者になろうとしている、と訴えたのです。だからピラトはイエス様を尋問した時に「お前がユダヤ人の王なのか」と問うたのです。イエス様はそれに対して、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになりました。これは問いに対する答えにはなっていません。イエス様はこの問いには答えようとなさらなかったのです。しかしピラトはこれを聞いて、訴えてきた人々に、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言いました。ピラトは、ユダヤ人の指導者たちが、自分たちの宗教的権威を守るためにイエスを抹殺したいと願い、そのために自分を利用しようとしていることを知っていたのです。利用されたくないピラトは、イエス様を釈放したいと思っていましたが、しかしこれまで見てきたように、指導者たちのみならず民衆までもがイエス様を十字架につけると叫び、要求したので、彼らを満足させるために死刑の判決を下さざるを得ませんでした。面白くないピラトはその腹いせに、イエス様の十字架に「これはユダヤ人の王」という札を掲げさせたのです。

これはピラトの、イエス様に対してと言うよりもユダヤ人たちに対する皮肉であり、侮辱です。ヨハネによる福音書を読むと、ユダヤ人の祭司長たちが、この札を「この男は『ユダヤ人の王』と自称した」と書き換えてくれるように求めたけれども、ピラトは頑としてそれを拒んだと語られています。ピラトは、ユダヤ人の王がその民の要求によって無様に十字架につけられた、という演出にこだわったのです。そしてその演出の一環として、他の二人の犯罪人を左右に、あたかも王であるイエスが左右に従えている家来のように配置して十字架につけたのです。イエス様は、二人の凶悪犯罪人を左右に従えた親玉として処刑されたの

です。この場面を見た人は誰も、イエスの十字架だけは他の二人とは違って罪なくして処刑されているのだ、などとは思いません。どう見ても、この中で一番悪いのは真ん中のイエスだ、イエスこそ罪人たちの王様なのだと誰もが思う、そういう並び方でイエス様は十字架につけられたのです。

○様々な侮辱の中で

34節の後半には、「人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った」とあります。十字架につけられる人は服をはぎ取られ、それは死刑執行人たちの役得となったのです。「人々」というのは十字架刑を執行したローマの兵士たちです。服をくじで分け合うというのも、その人を侮辱し、苦しめることなのです。イエス様はユダヤ人だけでなくローマの兵士にさえも侮辱され、辱められたのです。

35節には、「民衆は立って見つめていた」とあります。その「民衆」はイエス様を十字架につけることをピラトに要求した人々です。彼らがイエス様の十字架を見つめていたのは、決して同情や憐れみの思いをもってではありません。むしろ憎しみと嘲りの目で見つめていたのです。だからその次に、「議員たちも、あざ笑って言った」と続いています。議員たちは、イエス様をピラトに訴えた人々です。ついにイエスに勝利し、十字架につけて殺すことができる、その喜びをもって彼らはイエス様をあざ笑ったのです。彼らが言ったのは「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」ということでした。

さらに36節には、十字架刑を執行している兵士たちが「酸いぶどう酒」をイエス様に突きつけたとあります。このぶどう酒は本来、十字架の死刑を受ける者の苦しみを和らげてやるための麻酔薬として用意されていたものようですが、ここでは兵士たちも民衆や議員たちと一緒にイエス様を侮辱するためにぶどう酒を突きつけたと語られています。彼らも「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言ったのです。この兵士たちの嘲りの言葉は、イエス様の頭の上に掲げられていたあの札から来ています。ピラトの命令で「これはユダヤ人の王」という札を掲げた兵士たちが、それをネタにイエス様を嘲ったのです。つまり本日の箇所には語られていることは、イエス様が犯罪人たちのまん中で、その親玉のようにして十字架につけられ、その下では兵士たちがはぎ取った服をくじで分け合い、民衆たちは憎しみの目で見つめ、議員たちは「お前は神からのメシア、神に選ばれた者ではなかったのか」とあざ笑い、兵士たちは「ユダヤ人の王なら王様らしい力を見せてみろ」と嘲った、ということです。手足を十字架にくぎ打たれてぶら下げられるという十字架の死刑はただでさえ苦痛に満ちた、またそれが長く続く最も残酷な処刑であると言われますが、それに加えてイエス様は、これでもかこれでもかといわんばかりに徹底的に辱められ、侮辱されたのです。

○自分を救ってみろ

議員たちと兵士たちがイエス様をあざ笑った実際の言葉を見てみましょう。議員たちは、「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」と言いました。彼らは、イエス様が多くの病人を癒し、悪霊にとりつかれていた人から悪霊を追い出し、死んだ人を生き返らせることまでして、苦しみ悲しみの中にある人々を救ったことをとりあげています。そのように人々を救う力のある神からのメシア、つまりキリスト、救い主ならば、自分をこの十字架の苦しみと死から救ったらよいではないか、ということです。それができないということは、お前は神からのメシアでも、選ばれた者でもないということだ、お前が偽物のメシアだということがこれで明らかになったのだ、と彼らは言っているのです。

また兵士たちは、「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言いました。本当の王様なら、なぜ無様に十字架につけられるのか、つまりお前は王でも何でもなくのニセモノ、ただの大法螺吹きだったのさ、ということです。この二つの嘲りの言葉には共通点があります。「自分を救え」ということです。「自分を救うことのできないお前はニセモノだ」ということです。十字架につけられ、苦しみつつ力尽きようとしている主イエスは、そういう嘲りを受けたのです。主なる神様に愛され、選ばれ、遣わされた者なら、その主に頼んで救ってもらえるはずだ、主の力を受けて自分を救い、十字架の死を免れることができるはずだ、そういうことが起らないということは、お前は主に愛されてはいなかったのだ、自分が神に愛され、選ばれ、遣わされていると思ったのはお前の思い込み、幻想に過ぎなかったのだ、ということです。

○十字架の上で

イエス様が受けたこの侮辱の言葉は非常に深刻であり、聖書を読んでいます私たちをも動揺させます。このようにイエス様は十字架につけられて殺されました。十字架は、今ではキリスト教のシンボルとなり、神様による救いの印とされています。今の時代において十字架は、悪魔の誘惑や、悪いものから自分たちを守ってくれる、お守りのように思われているところもあります。そのような理由で十字架を首から下げている人もいます。ですが十字架というものは本来、とても残酷な死刑の道具です。極悪人が見せしめのために殺されるためのものです。イエス様はそういう極悪人の一人として、十字架の死刑に処せられたのです。鞭で打たれ、十字架を担いで運ばされ、服をはぎ取られ、手足に釘を打たれてぶら下げられ、その苦痛の中で死んだのです。そこには何の救いも感じられません。神の愛とか、守りとか、恵みなどというものが一切失われた現実がそこにはあるのです。

議員たちや兵士たちが言っているように、このような救いのない苦しみの中で死んでいこうとしている者が、救い主だったり、王だったりすることなどあり得ないのです。人を救うためには、救うことのできる力が必要です。自分が滅びてしまうようでは、人を救うことなどできません。王であるというからには、人を従わせるだけの権力が必要です。捕えられ、裁かれ、死刑に処せられてしまうようでは、王ではあり得ないのです。だからお前は救い主でも王でもない、という彼らの嘲りは当たっています。イエス様を信じる信仰に生きようとする私

たちも、このようにイエス様を救い主だとか王だとか信じるのはお前の思い込みに過ぎないのだ。イエスという人物にそんな期待を抱くと、必ず裏切られるぞ、という嘲りやののしりをこの世から受けるのです。そういう嘲りやののしりを生む思いが、まさに新型コロナウイルスという困難な現実の中で今、多くの人の心にあるのです。神は一体何をしているのか、恵み深い愛の神がいるというなら、なぜこんな悲劇が起るのか、このように人々が苦しみ、死んでしまうこの出来事のどこに、神の救いがあるのか、神が本当に神であると言うなら、いますぐその力を見せてみろ、苦しむ人々を救ってみせろ、そういう思いが今人々の心の中にうず巻いています。また、私たちの心もまた、そういう嘲り、ののしりによって動揺しているのではないのでしょうか。

十字架につけられたイエス様を嘲り、ののしった声は、今私たちの周囲にも溢れているのです。私たち自身の心の中にも、「自分を救えない者がどうして人を救えるのか」という深い問いがあるのです。それは決して新型コロナウイルスという出来事があったからだけではありません。人間の歩みには、様々な苦しみ悲しみ困難があります。中にはいわゆる不条理、なぜ自分がこのような苦しみ悲しみを味わわなければならないのか、その理由が全くわからないようなものがあります。そういう苦しみ悲しみを前にして、私たちは、神が本当に神ならなぜ今救ってくれないのか、救いの力、愛や恵みの力を発揮しない神など本当の神ではないのではないのか、と思い、さらには、もともとそんな神などいなかったのではないのか、自分の思い込み、幻想に過ぎなかったのではないのか、とも思ってしまうのです。

○とりなしの祈り

このような嘲り、ののしりを受けたことこそ、イエス様にとって、手足を釘打たれる肉体の苦痛に勝る苦しみだったと思います。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という叫びはイエス様のその苦しみから発せられた言葉です。しかしルカによる福音書ではむしろ、イエス様が黙ってその嘲り、ののしりに耐えておられるお姿を語っています。その忍耐の中でイエス様がお語りになった一言が34節にあります。「そのとき、イエスは言われた。『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです』」。

十字架につけられた肉体的苦しみの中で、また侮辱され、嘲られ、ののしられる中で、彼ら、つまり自分を十字架につけた人々への赦しを、イエス様は父なる神様に祈ったのです。その「彼ら」の中には、もちろん、嘲り、ののしっている民衆たちも含まれています。イエス様を十字架につけて殺し、抹殺しようとしている、そこにおいて、自分を救う力のないお前は救い主でも、私たちの王でもないとののしっている人々、それら全ての人々の罪の赦しを、イエス様は十字架の上で、祈り願われたのです。その祈りの根拠というか前提として、彼らは「自分が何をしているのか知らないのです」と言っておられます。イエス様を十字架につけた人々も、嘲りののしっている人々も、自分が何をしているのか、そして今何が起っているのかを知らないのです。だから彼らを赦してくださいと祈っておられるのです。

34節のこの部分全体に括弧がつけられています。それは、古い写本にこれが欠けているものがあり、もともとこの部分があったのかどうか疑いがある、ということです。しかしこの

お言葉は、ルカによる福音書の描くイエス様のお姿によく合っているものですから、私たちはこれを十字架の上でのイエス様のお言葉として大事にしたいと思います。

○自分が何をしているのかわからない私たち

彼らは何を知らなかったのでしょうか。イエス様が十字架につけられることにおいて何が起っていたのでしょうか。それは、父なる神の独り子であられるイエス様が、神様に背き逆らい、神を神として敬わず、従わず、自分が主人となって、自分の思いによって歩もうとしている、その私たちの罪を全て背負って、引き受けて、十字架にかかって下さったということです。十字架の死刑を受けなければならない罪人は本当は私たちであるのに、その私たちの身代わりとなってイエス様が十字架につけられたのです。

神の独り子であるイエス様は、これまで数々の奇跡を行い、病人を癒し、悪霊を追い出し、死者を復活させることすらもなさいました。イエス様はそのような力を持った方であり、その力によって十字架の死を免れることもおできになるお方です。また父なる神様はイエス様を十字架につけようとする者を滅ぼし、救い出すことがおできになるお方です。しかしイエス様も、父なる神様も、そのようなことをしようとはせずに、イエス様が十字架につけられ、徹底的に侮辱され、嘲りとののしりを受けながら死ぬことを選びとって下さったのです。それは全て、私たちのため、私たちの罪が赦され、神様の祝福を受けて生きる神の子とされるためでした。

私たちは自分の罪の中で、また人々の罪の中で、様々な苦しみ悲しみに陥ります。自分が人を傷つけ、人間関係を破壊してしまう、とりかえしのつかない罪を犯してしまうことがあります。また人のそういう罪のために苦しみ、傷つき、赦せないという思い、憎しみを抱き、そこからどうしても抜け出せないということもあります。神様をも、人をも、愛そう、愛したい、愛さなければと思いつながら、それができないという現実の前に立たされた時に私たちは、絶望を覚えます。また私たちのこの世の歩みは、様々な出来事に翻弄され、思わぬ苦しみを背負うことがあります。新型コロナウイルスだけではなく、ある日突然、病気になったり、いつの間にか、事故や事件に巻き込まれたりすることもあります。それらの出来事の中で、いったい神様の救いなどどこにあるのか、神が私たちを愛しておられ、恵みを与え、守り導いて下さると言うけれども、そんな愛や恵みや守りはどこにも見えないではないか、と思うことがあります。

イエス様の十字架は、まさにそのような、救いも助けも恵みも愛も見当たらない現実のただ中に、神様の独り子が身を置き、その苦しみ悲しみ絶望を自分の身に背負い、引き受けて下さったという出来事です。イエス様がこのように十字架にかかり、自分を救うことができずに殺されてしまう、その苦しみと死を味わって下さったからこそ、私たちがそのような救いの見えない、苦しみの中で、絶望を覚える時にも、そこに、十字架につけられた主イエス・キリストが共にいて下さるのです。十字架の前でイエス様をののしっていた彼らが知らなかったのは、この恵みだったのです。私たちも、このことをしっかりとわきまえていないと、自分を救うことのできない救い主など救い主でない、というののしりに負けてしまい、イエス

様を救い主と信じて依り頼むことは幻想に過ぎなかったのではないかと思ってしまうのです。

しかし、イエス様が自分を救うことができず、いや救おうとなさらず、私たちの罪を背負って十字架の苦しみと死を引き受けて下さったからこそ、そして父なる神様が愛する独り子イエス様を救うのではなく、十字架の苦しみと死へと歩ませて下さったからこそ、十字架の苦しみと死を本来受けなければならないはずの私たちが赦され、救われる道が開かれたのです。

○ただただ、十字架につけられた王

人を救うためには救うことのできる力が必要だ。自分が滅びてしまうようでは、人を救うことなどできない。王様であるというからには、人を従わせるだけの権力が必要である。捕えられ、裁かれ、死刑に処せられてしまうようでは、私たちの王様ではあり得ない。それが私たちの常識です。しかし主イエス・キリストの十字架は、その常識をくつがえす出来事です。

捕えられ、裁かれ、死刑の判決を受け、鞭打たれ、十字架に釘づけられ、人々の侮辱、嘲り、ののしりを受けつつ死んだ、このイエス様にこそ、神様の独り子、まことの神であられ、私たちのまことの救い主、私たちの罪を赦し、新しく生かして下さるまことの王様であられるのです。このことを知らずに、イエス様を十字架につけ、ののしている人々のための赦しを、イエス様は父なる神様に祈って下さいました。それは私たちのための祈りでもあります。私たちは、このイエス様の十字架の上での執り成しの祈りによって、赦され、新しく歩み出すことができるのです。

イエス様を信じて新しく歩み出す私たちは、自分が何をしているのかをはっきりと知っています。私たちは、十字架の死によって私たちの罪を全て赦し、苦しみや悲しみを共に担って下さる神様の独り子イエス・キリストをまことの王様としていただき、その王様の下で、その恵みを喜び、感謝しつつ、キリストの父である神様を礼拝し、ほめたたえつつ生きているのです。私たちの目の前に広がる現実には、とても厳しく困難に見えるかもしれませんが、そのような現実には心揺さぶられ、この弱い私の為に、イエス様が十字架におかかりになって下さった。復活して今も生きておられるイエス様が、私たちの為にとりなしの祈りをささげてくださっている。この恵みが私たちに向けられて注がれているその恵みの事実には私たちが立つときに、一歩前に踏み出す力が与えられるのです。祈りましょう

○祈り